令和５年度　(インクルーシブ教育実践研究校Ｂ)報告書　三入小学校

１　学校の課題

本校の全国学力・学習状況調査の結果は，平成３１年度の３０ポイントマイナスをピークに令和４年度まで平均１０ポイントマイナスという状況が続いている。要因の一つとして，学習面での困難さから教室外で個別の支援を行う児童や，頻繁に学習サポーターの支援を必要とする児童が全児童数の１０．２％を占めていることが挙げられる。そのうち診断名がある児童は全体数の４．５％である。

このように個に応じた指導や支援を必要とする児童が多いが，教師が的確に教育的ニーズを捉えることができておらず，児童の学習参加への意欲低下を生み出しているものと考える。児童の個別の課題や実態把握については意識してきているものの「ユニバーサルデザインと合理的配慮の違いが理解できていない。」「どのようなことを行えばよいか分からない。」など教師に「困り感」があり，すべての教師が合理的配慮など特別支援教育について学ぶ必要性と授業改善に取り組む重要性を感じた。

これらのことから学校経営の柱は「授業改善」とし，校内研究主題を「ユニバーサルデザインを手法にした授業づくり」として継続的に取り組んでいる。今年度は，インクルーシブ教育に対する教職員の意識の向上を図り，「個別最適な学びと共同的な学び」の往還を研究主題に据えて合理的配慮の提供ができるように研究を進めることとした。

２　研究主題

すべての児童が自ら学ぶことができる授業づくりと評価
～合理的配慮により児童自らが学びのスタイルを選ぶ授業づくり～

３　取組内容

教師に対して「インクルーシブ教育」や「合理的配慮」，「ユニバーサルデザインの教育」との違いについての理解を深め，意識を向上させる取組と，その内容を基にした授業改善や合理的配慮の提供の取組を行った。

１研修

⑴「インクルーシブ教育」に関する研修
- 特別支援教育士　後野文雄先生による小中学校区での合同研修会
- 香川大学教育学部付属特別支援学校　校長　坂井聡先生による校内研修会
- 広島市立井口小学校　通級指導教室担任　津山裕美先生による校内研修会
- 日本 LD 学会特別支援教育士　穐山和也先生による校内研修会

⑵授業づくりに関する研修
- 研究主任による「個別最適な学びと協同的な学び」についての理論研修会
- 広島市教育委員会特別支援教育課指導主事・指導第一課指導主事による校内授業研修会

⑶コーディネーターによるインクルーシブ教育についての発信
- インクル通信「ちょこっとインクル Info.」（資料①）
- 暮会での児童情報共有と事例紹介

２授業づくり
- 「めあて」「まとめ」「ふりかえり」の視覚化と掲示物の統一化をする。
- 黒板に赤い矢印などを使って，今どこを学習しているのか視覚化する。
- 板書に問題文を大きく掲示したり電子黒板を活用したりすることで，いつでも学習内容を振り返ることができるようにする。

３「個別最適な学び」のための合理的配慮の提供

・校内研究会におけるルビ付きのワークシートや書字量を減らした穴埋め式のワークシートの作成など，読み書きに困難さがある児童に対する支援の検討。

・算数科における，計算の技能面を評価基準としない単元において，電卓や九九表の活用。

◎取組事例

・学習が困難で配慮が必要な児童について引継ぎシート，児童理解研修資料，昨年度の学力調査の結果から対象児童を絞り取り組んだ。

・本校の研究教科である算数科の学習中の配慮を中心に児童の見取りを進めることとした。

○A 児について

１・２年生では授業中落ち着かない様子で，集中が続かず絵本を見たり絵を描いたりしていた。ノートやプリント等は完成することが少なく途中での提出が多くあった。全体指導では発言も見られるが，個人思考場面では意欲が低下してしまうことが多く見られた。

【　児童の見取り　】

特別支援教育 CO が，算数科で T2 として入ることで学習中の様子について継続的に観察を行った。その際，本児ができることと難しいことは何か，またなぜそれらができたり難しかったりするのかの背景を検討し，アセスメントシート（下図・後野先生の研修で学んだ視点をもとに本校で作成したもの）に学習面以外の観点も整理した。

図　A 児アセスメントシート

学力面	※以下の【学習面実態】の欄参照
注意力	整理整頓が苦手。担任の配慮で，机上に置くものの位置を決めている。
衝動性	特に気にならない。
友達関係	良好な印象。ペアやグループでの話し合いができる。
コミュニケーション	語彙の少なさがある。困っていることを自分から伝えにくい。担任が声掛けしている。
情緒的	できなかったら，すぐに拗ねてしまい，諦めることがある。
こだわり	特に気にならない。
社会性	ルールを守ろうとして，周りにも注意するが，自分もできていないことがある。
運動面	姿勢の保持が難しい。横たわったり，背中が丸くなったりする。
感覚面	上靴を履けないときがあるが，担任の指導で定着してきている。

【　学習面実態　】

・文章を読み取ることが難しい。問題文を読む際には個別に読み上げたり，一緒に問題文を読み解説をしたりすれば取りかかることができる。

・日々の音読の宿題を嫌がるが，親が一緒に行うことでできることがある。

・算数科においては，基礎的な計算力，数に関する理解ができている。
しかし文章問題になると，読み間違えたりどこを読んでいたか分からなくなったりして回答が難しくなることがある。

【　合理的配慮　】

・視覚移動の距離が短くなるように，座席を最前列にする。

・文章はスケールを使うことで，視覚の焦点化を行い読みにくさを軽減する。

・必要に応じて，ワークシートやプリントにはルビをうつ。

【　評価規準　】

・読みに対する支援を行っていて，算数科の内容に直接の関連がないため，他の児童と同様の規準とする。

４　検証結果

１研修

・今年度の研修での学びを通して，留意されたことや取り組んだことについて教職員にアンケート調査を行った。主な結果は以下の通りである。

① UD の観点を踏まえて，教職員が授業で実践していること

・発問や指示の言葉は短く，明確に伝えること。
・指示を短く伝えようとしているが，できているかは分からない。
・スモールステップで学習に取り組めるように，授業の計画を立てること。
・具体物を用意したり，視覚的な支援を用意したりして授業を行うようにしている。
・チョークで文字を書くときは，白か黄色で書くようにしている。
・めあて，まとめ，振り返りを必ず板書している。

②合理的配慮の観点から子どもを見取る際に留意していること

・児童の優位な認知スタイルを把握しようとした。
・振り返り等から，一人ひとりの学習課題を教師だけでなく児童自身が把握できるようにしたいと考えた。
・書くことや聞くことの何が苦手なのかを，考えるようになった。
・ノートとタブレット，ワークシートのどれを使ったらよいか場面ごとに考えている。

③合理的配慮の観点から，子どもの実態を見取った上で取り組んでいること

・問題数を減らしたり，ノートを書くときに手元に見本を用意したりする。
・音声機能を使って，文字入力をする。
・九九表を利用したり，電卓を持ってきていつでも使用できるようにしたりした。
・現時点では，まだ取り組めていない。

上記の結果から，合理的配慮の観点から児童を見取ることについては，教職員が児童一人ひとりの行動の背景まで見取ろうという意識をもてていることが分かった。合理的配慮として取り組まれたことについては，少しずつ児童の課題に合った支援が学級内で行われ始めていることが分かった。しかし，どのような支援を行えばよいか分からないなど研修の学びと実践を結び付けられていないという感想もあるため，教職員全員が取り組めているとは言えないと感じている。

２授業づくり

・学習環境の統一化

「めあて」「まとめ」「ふりかえり」の視覚化と掲示物の統一を図ることで，児童がどの授業でも迷うことがなくなった。また，黒板の矢印などの表示がノートに写す際の支援となり学習意欲の向上に繋がった。

集中力が切れやすい児童にとっては，黒板や電子黒板に学習の主題が示されていることで，学習に気持ちを切り替えやすくなり，粘り強く学習に取り組めるようになった。

３「個別最適な学び」のための合理的配慮

・読み書きや計算に課題がある児童にとって，ワークシートや道具の手立てがあることで，少しでも学習に取り組んでみようというきっかけにつながった。
・教職員が様々な学習ツールが選べる授業を見ることで，合理的配慮が「甘やかし」ではなく，「必要な支援」として認識されるようになった。

○取組事例Ａ児の結果（算数科）

① CRT の問題への取り組みの比較と結果

前年度（２学年時）の結果

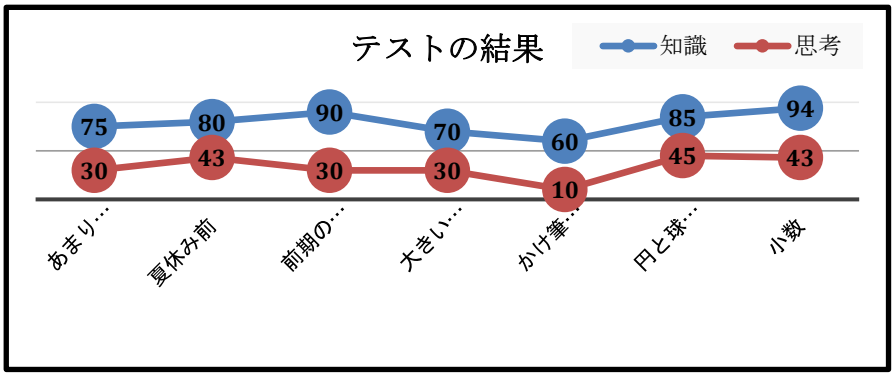
問題内容	たし算	ひき算	かけ算	大きい数	長さ･かさ	時計	総合結果
回答率	71.4%	50%	50%	85.7%	0%	0%	48.5%
正答率	28.6%	0%	33.3%	57.1%	0%	0%	22.9%

今年度（３学年時）の結果

問題内容	たし算・ひき算	かけ算	わり算	大きい数	長さ・重さ	時こくと時間	円と球	総合結果
回答率	100%	100%	100%	100%	75%	100%	100%	96.8%
正答率	100%	50%	33.3%	50%	0%	33.3%	75%	46.7%

CRT の問題への取り組み後のＡ児の「やりきった。」という言葉の通り，今年度は最終問題まで取り組むことができた。読むことに対する手だてが自信や意欲の向上に繋がり，最終問題まで諦めることなく取り組むことができたことが伺える。結果も昨年度より上がっていて，学力にも少しずつ結びつき始めていることが分かる。

② 単元ごとのテストや授業への取り組み方の変容と結果



テストの結果から点数的な向上は見られなかった。しかし，問題に取り組むペースが上がったことから，どのテストも最後の問題まで取り組めるようになった。

③日々の学習から

日々の学習では，困った場合でも自分で文章の読み方を工夫したり，教師に質問する，ペアやグループで相談するなど自分で学びのスタイルを選んで解決したりする経験を積み重ねている。ノートやワークシートも最後まで書ききって提出できるようになった。

Ａ児が読むことに対して自信をつけてきたことが学習意欲向上につながったのではないかと考えることができる。

5　研究成果

教員対象の研修を通して，教師の理解が深まり，意識を向上させることができた。それが授業改善にもつながり，学校全体でも児童が学習に向かう姿勢が高まった。

一部の児童については合理的配慮を提供することができ，一定の結果が表れた。３学年を中心に児童の様子を継続的に見取り，学習中に静かに困っている Ａ 児に気づくことができた。Ａ 児は自分なりに読みやすくする方法を探したことで，学習意欲が向上し，諦めずに学習に取り組む姿勢が身に付いた。しかし配慮を要する児童の実態把握の不足から，まだ手立てが行き届いていない課題がある。

本校には，学習中に配慮を必要とする児童がまだ多くいると推定される。支援を要する児童に確実に行うことができるように，今後はスクリーニングテストを実施したり，正確なアセスメントを行ったりすることが求められる。そのため，引き続き教師への理解の促進と，対象児童を増やし多くの事例を検討することに取り組んでいきたい。